細川護熙　Morihiro Hosokawa

細川護熙（ほそかわ もりひろ）は、1938年1月14日に東京都で生まれた日本の政治家、陶芸家である。1993年に38年ぶりとなる非自民の連立政権を樹立し、戦後日本政治を長く支えた「55年体制」を崩壊させた立役者として知られている。家系は由緒ある名門であり、旧肥後熊本藩細川家の第18代当主であるとともに、母方の祖父には戦前の内閣総理大臣を務めた近衛文麿を持つ。

細川は上智大学法学部を卒業後、朝日新聞社に入社し社会部記者として活動した。新聞社を退社後の1971年、参議院議員選挙に自由民主党から立候補し初当選。国会議員を2期務めたのち、1983年からは地元の熊本県知事に転身し、2期8年にわたり地方自治の舵取りを担った。知事時代には「一村一品運動」の推進や文化振興に力を注ぎ、独自のリーダーシップを発揮した。

知事退任後の1992年、細川は「既成政党の打破」を掲げて日本新党を結成し、代表に就任した。折からの新党ブームの波に乗り、同年の参院選、さらには翌1993年の衆院選（自身も衆議院へ鞍替え初当選）で同党は大躍進を遂げた。自民党が過半数を割り込むなか、新生党の小沢一郎らと手を結び、非自民・非共産の新党・旧野党による8会派連立政権をまとめ上げた。

1993年8月、細川護熙は第79代内閣総理大臣に就任した。55歳での首相就任は当時大きな注目を集め、内閣支持率は戦後最高（当時）となる80%近くを記録した。在任期間は約8ヶ月と短命であったが、長年の政治課題であった「政治改革」を成就させ、現在も国政選挙で採用されている小選挙区比例代表並立制の導入や、政党交付金（政党助成制度）の創設を決定づけた。しかし、自身の過去の資金調達（佐川急便からの借入金問題）を野党（自民党）から激しく追及され、政権運営が行き詰まったことから、1994年4月に電撃的に総辞職を表明した。

首相退任後も新進党の結党に参加するなど野党再編に関わったが、還暦を迎えた1998年に国会議員を辞職し、政界を引退した。引退後は神奈川県湯河原町の自邸に工房「不東庵（ふとうあん）」を構え、陶芸家としての活動に本格的に没頭。作陶だけでなく、書や水墨画、漆芸、全国の名刹（建仁寺や竜安寺など）への襖絵の奉納など、芸術の世界で高い評価を受けるようになった。2014年には「脱原発」を掲げて東京都知事選挙に立候補（落選）し一時的に注目を集めたが、基本的には政治と距離を置いた生活を続けている。

政治思想の面では、細川護熙は地方分権の推進や規制緩和、現実的な改革路線を重視する立場を取った。また、首相就任直後の記者会見で、第二次世界大戦における日本の行為を明確に「侵略戦争、植民地支配」と表現するなど、リベラルで率直な歴史認識を示したことでも知られている。

細川護熙は、名門の出自でありながら「新党結成」と「政権交代」という劇的な手段で55年体制に終止符を打った、日本政治史の転換点を象徴する重要な政治家である。